

アーノルド・ファイン作品集

横山孝 一* 編訳

(二〇〇六年十一月三十日受理)

はじめに

アーノルド・ファインは、いわゆるプロの小説家ではない。長年、ユダヤ系アメリカ人向け週刊紙の編集にたずさわり、コラムを担当していたので、文章力はさすがだが、彼の短編小説はどことなく素人くささが漂う。いまどき、これほどセンチメンタルな話を書く作家はなかなかいないだろう。しかし、まさにそこが彼の魅力なのだ。障害者教育にも尽力し、教師としても高い評判を得た人だけに、温かな思いやりが感じられる作風である。プロ・アマ問わず人生の諸問題を扱った文章を集めた『こころのチキンスープ』シリーズに掲載された作品は、読者から反響があったらしい。筆者も注目したひとりだ。

以下、アーノルド・ファインの短編小説三編を翻訳紹介する。

ハイスクールの英語教師

おばあちゃんのソフィーが台所仕事をしていると、孫娘が学校から帰ってきた。ティーンエージャーの彼女は身をかがめ、祖母にキスする。「ハイ、おばあちゃん。なに、つくってるの?」

「夕飯よ。学校はどうだった?」しっかりとキスを返したおばあちゃんが訊く。

「おばあちゃん、あたし恋してるの」

「相手がだれか訊いていいかい? 先週いっしょに宿題をしていたキュートな男の子かしら」

「ちがうわ」恋の病特有のため息をついて、ジェニーは答える。「英語の先生を好きになっちゃった。若くてとってもかっこいいのよ! 新任で、すごいハンサム。だから授業中ずっと見惚れてるわ。それに話し方もすてきな。ラジオのアナウンサーみたいなんだから」

「おやまあ。先生をそれほどほめることができるなんてすてきね」おばあちゃんが感心する。

「きょうはエリザベス・バレット・ブラウニングの詩を読んでくださったの」孫娘はため息をつく。「一日中、彼の朗読を聴いていたいわ。低音でとっても温かみのある声なんだから。『どんなにあなたを愛しているか』って題の詩を聴いてるとき、正直言って、先生が、直接あたしに読んでくれている気がしたわ」

「おやまあ」おばあちゃんはほほ笑み、その場の空気を壊しにかかった。「宿題はないのかい?」

ジェニーはもう一度ため息をつく。「数学の宿題があるわ。それと英語の作文を書かなきゃいけない」

「それじゃ、すぐに取りかかりなさい。宿題を片づけるの。それから夕飯をテーブルに並べるのを手伝ってちょうだい。おかあさんが帰ってくる前によ」

まだうつりしているジェニーは、祖母のほうを向くとたずねた。「おばあちゃん、恋したことある?」

おばあちゃんは機嫌よくクスクス笑いはじめた。「もちろんよ! わたしだって赤ちゃんだったこともあるんだから」おばあちゃんがかみこんで、若い孫娘にささやくように付け加えた。「……それに、わたしも英語の先生に恋をしたことがあるのよ。ああ、彼は若くてハンサムだったわ!」

ジェニーはいすを引っぱり出してほほ笑む。「もって話して。何があったか聞かせてよ」

おばあちゃんは、流しの水でさっと手を洗いタオルでふくと、満面の笑みを浮かべた。

「とってもハンサムな人だった。それでね、家に帰って、わたしが何をしたら思う? 先生にラブレターを書いたのよ」

「まさか」若い孫娘には信じられなかった。

「ほんとうよ。先生をどんなにハンサムと思っているか、先生の堂々とした話し方がどんなに好きか書いたの。次の日、だれも見えないときに先生の机の上はその手紙を置いたわ。ベルが鳴って、わたしたち生徒は次の授業に行った」

ジェニーは目を丸くし、ニヤリと笑う。

*人文科学系・英米文学

アーノルド・ファイン作品集

おばあちゃんはつづける。「翌日、教室に入ると、先生がわたしをじっと見るの。ああ、とってもやさしい目だった。読んでくれたんだってわかった。わたしのことをどれくらい思ってくれているのかしらって考えたわ。それから授業が始まって、先生は教卓から紙の束をとって生徒に配ったの。わたしの番がくると、渡されたのは、きのう置いたあのラブレターだった。わたしはそれ見て、死にたくなかった。添削してあったのよ！ 赤ペンでびっしり訂正されていたわ。こう書いてあった。『ミス・グッドマン。きみの題材は非常にすぐれているが、文法と句読点の使い方がまるでなっていない。この課題は不合格にせざるをえなかった。どうかもっと頑張ってほしい』」

おばあちゃんは当時を思い出し、ほほ笑んでいた。

「わたしはすっかり打ちのめされたわ。紙の反対側には短くこう書き加えられていたの。『これらのまちがいを直して明日、再提出すること』」

ジェニーはおばあちゃんの腕をつかみ、おばあちゃんをぎゅっと抱きしめる。「それからどうなったの？」

おばあちゃんは笑い出した。「泣きながら家に帰ったわ。よくもこんなひどい仕打ちができたものね。こんな愛してるのに。先生は、わたしの送ったラブレターを実際に採点したのよ。それでも、わたしは机に向かい、先生の命令どおり、まちがいをすべて訂正してラブレターを書き直した。書いてるとき、涙が紙の上にポタポタこぼれ落ちたわ。インクがにじんで、泣いたのがわかるほどだった。心底傷ついたのでよ」おばあちゃんが説明する。

「次の日、授業で、わたしは書き直したものを提出した。先生は教卓の上の提出物を見ると、よしって頷いた。ラブレターの一件はこれで終わり。ハイスクール一年目の『英語』で、先生がわたしに落第点をつけたなんて信じられる？ でもね、彼とは仲直りしたの」

おばあちゃんはいすから立ち上がり、レンジのほうに向かう。「わたしは恋で盲目だったのね。それから何年かして、ハイスクールを卒業すると、大学に進学した。ある日、地下鉄で、なんと、思いがけない人が乗ってきてわたしの前に立ったの。すばらしい紳士がね。ああ、彼はすごくすきだったわ。わたしだと気づいてくれたかどうかはわからなかったけど、わたしは先生だとすぐわかった。わたしは言ったわ。『失礼ですが、あなたは……』彼は、わたしを見て『おやっ、これはこれ』とほほ笑んだ。『ぼくがハイスクールで初めて教えた年に、あのすばらしい手紙を書いてくれたかわいなお嬢さんですね』

「とても恥ずかしかった」おばあちゃんはつづける。「でも、おとなしく頷いた

の。それから彼が言った。『きみには謝罪しなければいけないね。土曜日の夜に埋め合わせをさせてくれないか。シェイクスピア・フェスティバルのチケットがあるんだ。きつと楽しめると思う』」

おばあちゃんはほほ笑んだ。「そしてそれが始まりだったの。彼とはちゃんと仲直りした。五十一年前、あなたのおじいちゃんと結婚したのだから。きょうまでずっと彼は、わたしを『ぼくの幼な妻』って呼んでいるわ」

おばあちゃんはホッと一息ついて付け加えた。「信じられる？ 彼ったら、今でもまだ、わたしの綴りや文法を直すのよ。さあ、テーブルの準備を終えてしまいましょ」おばあちゃんは大きな声で言った。「あと数分で、おじいちゃんが散歩から帰ってくるわ」

(Arnold Fine, "The High School English Teacher")

デーヴィッドとリリーの出会いの秘密

これは、デーヴィッドとリリーがどういういきさつで出会ったか、とにかく、ふたりがいつも私たちに語っていた話である。その真相が明かされたのはつい最近のことだ。

何年も前、私たちが住んでいるブロンクスのアパートの三階に立派な家族が引っ越してきた。デーヴィッドはその家の一人息子で、医学部に通っていた。大の読書家で、あいている時間はたいてい図書館で過ごした。

そこで働く司書のリリーは若く、もの静かでかわいらしい。子供だった私たちはみな、彼女が大好きだった。探している本が見つからないと、いつでも仕事を中断して親切そうにほほ笑み、すぐ探しだしてくれた。よく働くお姉さんだった。

リリーも、私たちの隣人になったデーヴィッドをひそかに崇拜していた。近所にあるこの小さな図書館に彼がやってくると、かならず目をパッと輝かせ、書架の間を歩きまわる姿をじっと見守る。とはいえ、決して彼と話そうとはしなかった。リリーはものすごく内気だったし、当時は正式に紹介されなければ、女性には、知らない人には話しかけないものだったからだ。

ある晩、リリーが図書館の戸締りをしていると、助手をつとめる女性がカウ

ンターの近くでかがみこみ、封の切られていない封筒を床から拾いあげた。リリーに見せ、ふたりは、それが街の大きい病院から出されたものだと思った。「とても大事な手紙みたい」助手が言った。「かわいそうに、きつと死にもの狂いで探してるわ。ポケットか、本から落ちたんでしょうね」

リリーは宛名の住所をちらっと見て、それが自分のアパートのちょうど隣と知って驚いた。帰りにその男性のいるアパートに立ち寄れると思いい、手紙を預かった。

明かりを消し、図書館を閉めると、急いで帰宅。すぐさまカバンを置き、封筒をつかんで隣のアパートに走り、正面ロビーへ入って郵便受けを調べる。封書の宛名と同じ「ゴードン」という名字を見つけ、その部屋のベルを鳴らす。「どちら様？」雑音の多いインターホンから女性の大きな声がした。

「図書館で働いているものです」リリーは答えた。「デーヴィッド・ゴードン宛ての手紙が図書館の床に落ちていたのを見つけたんです。名前に心当たりはありませんか？ 重要そうな手紙なんです」

ちよつと間があつて、女性の声が答える。「はい、うちのですわ。B三号室まで届けていただけませんかねえ。数週間前にころんでしまつて、階段をおりられないのですよ」

リリーは歩いて三階まで上がり、玄関で、松葉杖に寄りかかる、感じのよい年配の女性に迎えられる。

「まあ、どうもありがとう」女性は言った。「ごらんのとおり、ほんとうに階段をおりられないのよ」

リリーはほほ笑んだ。「わかりますわ。あの、これがその手紙です。デーヴィッド・ゴードンさんはご主人ですか？」

「いいえ」女性は答える。「息子ですよ。手紙がどこに行つてしまつたのか、私どもは途方にくれていたところですよ」リリーを頭からつま先まで眺める。「手紙は図書館で見つけたとおっしゃいましたわね？」

「はい」とリリー。「わたしは司書をしています。でも、となりのアパートに住んでいるので、手紙を届けるのはたいしたことじゃありませんわ」

「あらっ、こんなところで話しているのもへんだわね」年配の女性は明るい笑みを浮かべながら言った。「中に入つて、すこし休んでいきなさい。お茶をいれるわ。どうぞ」

いすにすわるよう手で示し、年配の女性は手紙について話す。「息子に郵便物がくると、いつもは台所のテーブルに置くことにしているの。帰ってきた息子

がわかるようにね。これは大事な手紙なんで、息子の本にはさんでおいたんですよ。息子はね、医者になるために勉強してるの」誇らしげに言う。

ちよつどそのとき、ドアが開いた。息子のデーヴィッドが入つてきた。ずっとあこがれていた青年だとわかつたとたん、リリーは心臓の鼓動が速くなるのを感じた。母親が興奮気味に手紙のことを説明する。

デーヴィッドはリリーを見て、ひどく驚く。「あっ！ きみは図書館の人だね。ありがとう！ あちこち探していたんだ」母のほうを向く。「かあさん、ぼくは街の病院で研修させてもらうことになつたよ」

それからリリーのほうに向きなおり、恥ずかしそうにほほ笑んだ。「もう一度、お礼を言うよ。ミス……あっ、きみの名は訊いていなかったな」

「リリーです」リリーは最上級の温かい笑みを浮かべて言った。心臓はまだドキドキ鳴っている。きつと頬は真っ赤だわ、と思った。

その間、ゴードン夫人は足を引きずつて歩きまわり、テーブルにお茶とクッキーを用意した。「さあさあ、すわつて」若いふたりをせきたてる。

「専門は決まりましたか」リリーがデーヴィッドにたずねる。

「心臓にしました」デーヴィッドはまだ笑みを浮かべたまま答えた。「この手紙は、ぼくの医者としての出発点です。病院から連絡がないので、ほんとうに心配していました。どこか西部のほうに行くことも考えていたんですが、やはり、

地元この病院で学ぶほうがいい」

それから唐突に、デーヴィッドはこう切りだした。「土曜日の夜、ぼくと映画に行きませんか」

リリーが息をつくまもなく、ゴードン夫人がぎゅつとリリーの手を握る。「お願いよ、リリー！ どうか『はい』って言ってあげてちょうだい！」

リリーは笑った。「はい。喜んで！」

こうしてリリーとデーヴィッドはつき合いはじめた。

しかし、ここで包み隠さず本当のことを書こう。ふたりが結婚して二十五年がたち、デーヴィッドは手紙の真相を教えてくれた。いまでは心臓血管の専門医。愛するリリーは母親として三人の子供を育てた。彼女は、夫が私たちに話している間、ずつとそばに寄り添っている。

いまとなつては想像のつくことだが、デーヴィッドはそれほど本を読まなかつた。若くてかわいらしい司書が目当てだったのだ。近所の図書館で働くこのかわいい女の子のことを母に話したものの、内気でどうアプローチしたらいい

かわからない。すると、母親がある計画を思いついた。図書館へ行くたびに自分宛ての手紙を落とすのだ。リリーがその手紙を拾い、カウンターにデーヴィッドを呼び、会話が始まる。母はそんな展開を願った。早速、デーヴィッドは図書館を訪れるたびに、わざと手紙を落とした。が、そのたびに、それを見た親切な人が、すぐさま拾ってしまふ。「落ちましたよ！」という声を聞いて振り向くのだが、相手がリリーであったためしはなかった。

やっとリリーと話すことができた例の日は、リリーと手伝いの女性以外誰もいなくなるまでねばった。懲りずに、カウンターのそばに手紙を落とす。次の日戻ってリリーに「ぼく宛ての手紙を見かけませんか」と訊くつもりだった。作戦は想像したより、はるかにうまくいった。リリー本人が現れて手紙を届けてくれたのだから。

デーヴィッドの話が終わろうというとき、美しい夫人がヒステリックに笑い出した。

「デーヴィッド」息をつくると、リリーは言う。「あなたはしっかり封をしていなかったのよ。図書館で、手伝ってくれていた女性と封筒を開けてみたの。中には何も書いていない紙が一枚入っているきりだった。わたしは、あなたが何をたくらんでいるのか、なんとしてでも突きとめようと思ったの。だから、だまされたふりをしたわけ。デーヴィッド、あなたはとんだ大根役者だったわ！」

リリーは瞳を輝かせながら夫の目を見る。

「でもね、ああ、デーヴィッド、わたしはあなたをとつても愛していたのよ！」

というわけで、これがデーヴィッドとリリーの出会いの真相だった。

(Arnold Fine, "How David and Lily Got Together")

サイフ

凍えるほど寒い日だった。歩いて家に帰るとちゆう、ぼくは通りで、だれかが落としたサイフを発見した。拾い上げて、なかを見る。持ち主に電話するために、身分証明書の類をさがさそうと思ったのだ。しかし、わずか三ドルの金と、何年も入れたままにしているらしい、しわくちゃの手紙があるきりだった。

封筒はすりきれていて、読みとれるのは差出人の住所だけ。なにか手がかり

はないものかと、手紙をひらく。すると、一九二四年という日付が目に入った。六十年ちかくも前に書かれたものなのだ。

左端に小さな花が印刷された薄い青色の便せんに、女性の美しい字が並んでいる。それは、いわゆる「別れの手紙」だった。受取人の名はマイケルらしい。母が交際を許してくれないので、もう会えませんが、でも、ずっと愛しています、と書かれていた。ハンナと署名してある。

美しい手紙だったが、マイケルという名前以外、サイフの持ち主をつきとめる手がかりはなかった。ひよつとしてインフォメーションに電話すれば、封筒の住所の電話番号をオペレーターが調べてくれるかもしれない。

「オペレーター、」ぼくは切りだした。「ちょっと変わったお願いなんです。いま、拾ったサイフの持ち主をさがしているところなんです。サイフのなかにあった封筒の住所の電話番号をどうにかして調べていただけませんか」「オペレーターは主任と話すようすすめてくれた。主任の女性は、しばらくためらっていたが、言った。

「その住所で電話番号が登録されていますが、教えられません」それから、ていねいにこう付け加えた。「わたしが代わりに電話して事情を説明し、あなたとお話しになるか訊いてあげましょう」

数分待つと、主任がまた電話にでて言った。「お話しになるそうです」

つづいて電話にでた女性に、「ハンナという女性を知りませんか」とたずねると、相手は息を飲んだ。

「あら！ いま住んでる家は、ハンナというお嬢さんのいるご家族から買いましたのよ。でも、三十年前のことですよ！」

「その一家がどこに住んでいるかご存知ですか」

「何年も前に、ハンナさんがお母さまを老人ホームに入れなければならなかったのをおぼえています。たぶんそこへ電話したら、ハンナさんをさがしだせるかもしれません」

老人ホームの名前を覚えてくれたので、早速電話する。電話をうけた女性は、その老婦人は数年前に亡くなったが、娘さんの電話番号はわかると答えた。

礼を言って、教えてくれた番号に電話した。でた女性は、ハンナは現在、ある老人ホームで暮らしていると聞いた。

すべてが、ばかばかしくなった。なんだって、ぼくは、サイフの持ち主をさがすのにこんなに骨を折っているのだろうか。たった三ドルの金と、六十年ちかく昔の手紙が入っているだけなのに。

それでも、ハンナがいると思われる老人ホームに電話をかけた。電話にでた男性は言った。「ええ、ハンナさんはここにお住まいですよ」

もう夜の十時だったが、「いまから会いに行ってもいいですか」とたずねる。「そうですね」男はためらいながら答えた。「運がよければ、娯楽室でテレビをご覧になっているかもしれません」

「ありがとう」と言つて、タクシーでその老人ホームに行く。入り口で守衛と夜勤の看護婦が迎えてくれた。ほくは看護婦と大きなビルの三階にあがった。娯楽室でハンナを紹介してもらう。銀髪のやさしそうな老婦人で、目を輝かせながら温かな笑みを浮かべている。

ほくはサイフを見つけた一件を話し、例の手紙を見せた。左端に小さな花が描かれた薄青色の封筒を見たたん、彼女は大きく息を飲んで言った。

「あたしがマイケルに送った最後の手紙です」

ハンナは目をそらして少し考えこみ、それから静かな口調で語りはじめた。

「あたしは彼をとつても愛していません。でも、当時あたしはたった十六歳で、母は、若すぎると判断したのです。ああ、彼はとつてもハンサムでした。俳優のシヨン・コネリーに似ていました」

「ええ」彼女はつづける。「マイケル・ゴールドスタインはすばらしい人でした。万一见つかったら伝えてください。いまでもよく彼のことを考えています。それから……」少しためらい、くちびるをかむようにして言った。「いまでも愛していると伝えてください。だって……」目に涙をいっぱいためながら、ほくは笑む。「あたしは一度も結婚しなかったんですよ。マイケルほど好きになれる男性がいなかったからだと思います……」

ほくはハンナに札を言って去る。エレベーターで一階に戻り、玄関のドアのそばに立つと、そこにいる守衛がたずねた。「あのご婦人はお役に立てましたか」「手がかりをくれました」と答える。「少なくとも、氏名がわかりました。でも、しばらく放っておこうと思います。このサイフの持ち主をさがすのにこんな時間になってしまいましたから」

ほくはサイフを手にしていった。シンプルな茶色の皮製で赤いレースがついている。それを見た守衛が言った。「あつ、ちょっと待って！ それはゴールドスタインさんのサイフだ。その真つ赤なレースを見れば、まちがえるはずがない。なくしてばかりいるんですよ。廊下で三回以上、この私が拾いました」

「ゴールドスタインさんってだれですか」手がふるえだすのを感じながら、たずねる。

「八階にいるお年寄りですよ。まちがいないくゴールドスタインさんのサイフだ。散歩の途中でなくしたんでしょう」

ほくは守衛に札を言って、急いで看護婦のところへ駆け戻った。いま聞いた話をする。ほくたちはまたエレベーターに乗りこむ。ゴールドスタインさんが起きていますようにと祈った。

八階でその階の担当看護婦が言った。「まだ娯楽室におられると思います。夜中に読書するのがお好きですから。すてきな老紳士ですよ」

ほくたちは唯一明かりのついている部屋に向かった。そこには、読書中の男性がひとりいた。看護婦がそばに寄って、サイフをなくしたかどうか訊く。ゴールドスタイン氏は驚いて顔をあげ、尻のポケットに手をやった。「あつ、ない！」

「こちらの親切なかがサイフを見つけて、あなたのものかもしれないと話していたところですよ」

ほくはサイフを本人に手渡した。見た瞬間、ゴールドスタイン氏は安堵してほくは笑む。「ええ、わたしのです。今日の午後、ポケットから落ちたのでしよう。あなたにはお礼をしたい」

「いいえ、けっこうですよ」とほく。「でも、お話ししたいことがあります。ほくは、サイフの持ち主を知りたいと思つて、なかの手紙を読みました」

突然、微笑が消える。「手紙を読んだって？」

「読んだだけじゃありません。ほくは、ハンナさんの居場所を知っています」

彼は急に真つ青になった。「ハンナ？ 彼女がどこにいるか知っているのか？ 元気なのか？ まだ昔みたいにきれいか？ お願いだ、どうか教えてくれ」

「彼女は元気ですよ……あなたが知っているとおりの美しいかたです」ほくは静かに言った。

老人は想像してほくは笑み、たずねる。「ハンナの住所を教えてくださいなぬか。

明日電話したい」不意に、ほくの手をつかんで話します。「聞いてください。わたしは彼女をとつても愛していたので、その手紙をもらったときに、文字通り、わたしの人生は終わってしまった。一度も結婚しなかったのです。ずっと彼女を愛しているのだと思います」

「マイケルさん」ほくは言った。「いっしょに来てください」

ほくたちはエレベーターに乗って三階におりた。廊下は暗くなつていて、行く手を照らすのは、一つか二つの小さな夜間ライトだけだった。娯楽室につくと、ハンナはひとりすわつてテレビを見ていた。

看護婦が彼女のところに歩いていった。

「ハンナさん」静かに呼び、入口でぼくといっしょに待っているマイケルを指さす。「その男性を知っていますか？」

ハンナはめがねを調整してしばらく見つめていたが、なにも言わない。

マイケルはささやくように話しかけた。「ハンナ、マイケルだよ。僕のことをおぼえているかい？」

ハンナは息を飲んだ。「マイケル！ 信じられない。マイケル、あなたなの！ あたしのマイケル！」

マイケルはゆっくりとハンナのもとへ歩いてゆき、ふたりは抱き合った。ぼくと看護婦は涙を流しながら、その場をあとにした。

「ごらん下さい」ぼくは言った。「慈悲深い神様がどんな働きをなさるか！ 神様がお望みになれば、こうなるんですよ」

三週間ほどして、老人ホームから会社に電話をもらった。「日曜日の予定を変更して、結婚式に出ていただけますか？ マイケルさんとハンナさんが結ばれるんですよ！」

それは、すばらしい結婚式だった。老人ホームにいる人たちはみな正装して、このお祝いに参加した。明るいベージュのドレスを着たハンナは美しかった。ダークブルーのスーツを着たマイケルは鼻高々だった。ふたりの希望で、ぼくは新郎付添い役をつとめた。

老人ホームでは新婚の部屋を用意した。信じた話だが、七十六歳の花嫁と七十九歳の新郎は事実、ティーンエイジャーのように振舞っている。

六十年ちかくつづいた大恋愛を締め括るには文句なしの大団円だ。

(Arnold Fine, "The Wallet")

Arnold Fine's Short Stories:
"The High School English Teacher,"
"How David and Lily Got Together," and "The Wallet"
[A Japanese Translation]

Koichi YOKOYAMA

Arnold Fine, a Jewish American writer, surely remains unknown in Japan; even in the United States, his name must be unfamiliar to most Americans, though there are fans of his stories. According to his website, which was updated November 1st, 2006, he has been the senior news editor of *The Jewish Press* for more than 50 years. At the same time he was coordinator of special education at a high school in Brooklyn, teaching handicapped and brain-injured children. Since his retirement from the city school system, he has worked as an adjunct professor at Kingsborough Community College. He was nominated twice as the "Teacher of the Year" in New York State.

It seems, however, Arnold Fine will be remembered as the writer of nostalgia stories rather than the excellent teacher of special education. His short stories published in the *Chicken Soup for the Soul* series have been attracting some attention in several countries, including the U.S. In fact, I am one of the *Chicken Soup* readers who have found his literary work quite interesting.

Even though he is an amateur, his charming stories are worth translating and introducing in Japan. Some may think they are too sentimental but others can really enjoy reading them. So just try in my Japanese version. Here in this bulletin I translated three stories from the above-mentioned series: "The High School English Teacher" and "How David and Lily Got Together" from *Chicken Soup for the Single's Soul* (Florida: Health Communications, 1999) and "The Wallet" from *Chicken Soup for the Woman's Soul* (1998).